

# ことばの不思議

児 玉 徳 美

## 1. ことばのなぞ

日常生活で不可欠な存在である空気や水と同じように、ことばそのものを意識することはあまりない。意識的にそれが何であるかを探ろうとすると、空気や水は人間の外にある物質で冷静に分析可能な対象となるが、ことばは人がみずから発しているながら、あるいは発しているだけに、その正体がつかみにくい。人間のみが有することばの正体がつかみにくいということは、ことばを駆使する人間の正体がつかみにくいことにもつながっていく。

ことばが正体不明のなぞに包まれているとはいえ、そのなぞは不可思議な力でわれわれの日常生活を支えている。ことばの背後にはどのような特質が隠されているのであろうか。

### (1) a. ことば≠文化

敬語があるからといって、年長者を敬うわけではない。

### b. 生得的能力

教えてもらわなくてもわかっている。

### c. 認知の反映

地球は人間や自分中心に回っている。

### d. 記号のあいまいさ

何本目の頭髮が抜けると「ハゲ」と呼ばれるのか定かでない。

### e. 言説の秩序

常に「話せばわかる」わけではない。

それぞれの特質について (1a) からもう少し詳しくみてみよう。ことばも文化も慣習化された行動であり、それぞれ人間の心的過程を表し、人間社会の必要性を満たすものとして発展してきた。ことばは歴史的に形成されてきた文化の一部であり、しばしば非言語的な行動と連動する。しかしことばと文化は常に1対1で対応するものではなく、因果関係や等式で結ばれるものでもない。(1a)が指摘しているように、敬語は話し相手の年長者や身分の高い人に対して敬意を表す表現であるが、そのことが行動のうえで年長者などを敬うことを保証するものではない。その証拠に、例えば東京とロンドンで混んだバスに老人を乗せ、その老人がどちらで早く座席に座れるかを実験してみたらよい。英語と違って日本語には敬語があり、ロンドンより東京で早く老人が座れると考えられるかもしれない。しかしその考えは実態と大きく異なる。

言語習得の特徴として子どもはどこに生まれてもその社会の言語を習得でき、大人からいちいち教えてもらわなくても複雑であいまいな文を理解でき、実際に使われる文とそうでない文を区別できる(詳しくは児玉2006:27参照)。このようなことから、(1b)が指摘するように、言語能力は生得的に人間に埋め込まれているといえる。しかしここで注意すべきは、生得性に由来する言語特質がす

すべての言語に同じように具現されているわけではない。子どもはどの社会に生まれてもその社会の言語の発音を習得する点、あらゆる言語で発せられる音を生得的に身につけることができる。しかし諸言語はそれぞれ固有の音韻体系を有し、人間言語の広範な音声目録のうち一部を選び、他の部分は音韻体系から除外している。例えば日本語のラ行は英語の /r/ と /l/ の区別をしない。子どもが成長するにつれて音韻体系が安定すると同時に、音韻体系から除外された音声は忘れられ、大人になってその音声を復元しようとしても困難になる。同じように、人間は生得的にあらゆる言語に含まれる意味に対応する概念化能力を有している。しかし諸言語はそれぞれ固有の概念体系を有しており、概念化能力が諸言語の概念体系で同じように具現されているわけではない。要するに、人間は生得的能力に由来する現象が諸言語に同じように普遍的に具現されているわけではない。生得性と普遍性は明確に区別されるものである。

人間が周囲の事物や事態を見る眼差しに共通なものと言語固有なものがある。まず共通なものからみてみよう。眼差しは外界の多様なものに均等に関心を向けるわけではない。(1c) が指摘しているように、一般に認知のあり方がことばに反映し、無生物より生物、動物より人間、同じ人間でも2人称・3人称の者より話し手自身の1人称に焦点が向けられる。例えば老人と犬が散歩している姿を見て、実際は犬が老人を散歩させているかもしれないが、どの言語の単文においても通例強い焦点が向けられるものが主語になり、「老人が犬を散歩させている」といい、太郎と私がきのうけんかしたことを伝えるときは「\*太郎がきのう私とけんかした」ではなく、「私がきのう太郎とけんかした」と表現する。また出来事が生じた時間上の認知順序を語順に反映して「\*私は晩まで朝から働いた」とはいわず、通例「私は朝から晩まで働いた」という。しかし視点の当て方は言語や個人により異なることもありうる。話し手との距離を示唆する直示表現は英語では *this—that, here—there* の二分法であるが、日本語では「こ・そ・あ」の三分法をとる（認知原則としての図と地、写像一貫性、基本範疇優先、特質継承、縄張りの諸原則について詳しくは児玉 1991:115 - 126 参照）。(1c) は (1b) とともにことばの意味を形成する基本的な特質である。生得的な言語能力や生後の社会経験を介しての認知のあり様に由来し、普遍的なものと言語（または個人）固有のものがある。

ことばは無限に広がる世界を有限の記号を用いて分別しようとするものである。トマトも交通信号もサルのお尻も「赤い」と形容されるが、同じ「赤」ではない。ここで注意すべきは現実世界があいまいなわけではない。現実世界はあいまいとか正確とかと無関係であり、あるがままの姿で存在している。あいまいなのはことばである。ことばと世界は1対1で対応するわけではなく、ことばが示す範疇には連続体をなす世界の広範な領域が含まれる。ことばがあいまいであるのは、(1d) が指摘するように、一方では言語記号の構造上の限界に由来し、他方では話し手が世界の多様な領域のどこに焦点を当てるかにより表現が異なることによる。頭髪が薄くなっている人を「ハゲ」と呼ぶか否かが人により異なるのも自然な結果である。つまり、ことばの意味には幅や柔軟性があり、重要なことはその使い方である。状況に応じてあいまいさをそのまま受容したり、誤解を避けるためにあいまいさを少なくして正確を期すようにしたりする。

(1e) の「言説の秩序」は Foucault (1971) 後に確立した概念である。ここでの「秩序」とは「整然とした状態」をさすのではなく、歴史的に社会によって形成される言説のスタイルや様式である。社会の秩序が政治・経済・文化・家族・教育などの諸制度によって作りあげられているように、それを支える言説（の秩序）も人間の知や権力が結びついて作りあげられたものである。「言説」はもともと英語の *discourse* の訳で個人が発する具体的な「まとまりのある言語表現」の意味で用いら

れていたが、「言説の秩序」が確立した今日では「言説の秩序」と同義の抽象名詞としても用いられる。言説（の秩序）が特定の社会や時代により構造化され、統御されたものであるとすれば、そこに住む話し手は無意識のうちにその社会や時代の価値観を背負っており、言説の秩序に抵抗し突き崩すことは決して容易ではない。言説の秩序は社会や時代、あるいはその影響下にある個人の価値観により異なり、養老（2003）のいう「バカの壁」にも通じ、「話せばわかる」ほど軟弱なものではないのかもしれない（言説の秩序について詳しくは児玉 2006、2008 参照）。

上記（1a-e）の多様な特質が絡み合いながらことばのなぞを形成している。そのなぞにどのようなしくみが隠されているかを探るのが言語学に課せられた仕事である。

## 2. ことばと思考と文化

人間がことばを用いて思考する際、ことばと思考の間にはどのような関係があるのであろうか。思考過程において人は現実世界または感情や想像世界の特定領域に焦点を当て出来事・状態・その参与者などに注目するが、そこには時間・空間・認識・感情・社会状況などの多様な文脈情報も含まれている。思考を言語化する過程では話し手が思考のうち何をどのように言語に表すかを選択決定し、思考の組み立て方を言語を構成する文法・言説の秩序・音韻体系と結合させて言語化は完了する。思考から言語化までの過程を要約すると次のようになる。

(2) 思考（言語化される前の概念化）→言語化された意味→文法・言説・音韻の構造→言語表現

(2) は Chafe (2005) を参考にし、それを少し修正したものである。(1) との関連でいえば、思考は主に人間固有の生得性 (1b) や認知 (1c) との関連で生まれ、言語化された意味は (1b,c) のほかに、言語記号の特質 (1d) および社会との関連 (1a,e) で生成される。(2) は思考から言語化に至る過程を図式的に示しているが、重要なことはこの過程が無意識的ともいえるほど瞬時に行なわれることである。またことばが習得された段階で矢印はしばしば右から左に向かい、言語表現や文法・言説構造が思考の組立てに影響を与えることがある。そこで「思考」という場合、(2) の左端は狭義のもので言語化される前の概念化に相当し、広義には (2) の左端から右端、または右端から左端に至るまでの心的過程も含む。思考とことばの関係はこのように流動的であるため、ことばの特質についての解釈はしばしば人により異なる。

子どもは生後社会での経験を介して言語習得と併行して認知発達を遂げるが、言語習得と認知発達の関係についていくつかの説が唱えられている。ことばの経験に先立って空間などの知覚発達が進むことにより形成された空間概念などが言語化されるとする認知優先説、あるいは逆に言語を習得することにより言語化前の概念が明確になるとする言語優先説がある。また認知と言語を一体とする認知言語学の用法基盤モデルがある。言語主体者が経験を介して認知する事態解釈では話し手が言語化しようとする事態は具体的な言語使用を基盤に形成されるという。一方、生成文法は言語習得や認知発達はそれぞれ別個のモジュールをなす生得的な能力に由来するという生得論を主張している。やや図式的に言えば、言語習得が認知言語学では経験を介してボトム・アップ式に進むのに対して、生成文法ではトップ・ダウン式に人間の生得的な能力に埋め込まれていることになる。今日、いずれにも決着がついていないが、言語習得や認知発達は四者のうちいずれかによるというより、四者の相互作用が発達段階により異なるというほうが実態に近いといえよう。同じような議論

は語彙から言説に至る言語表現の解釈をめぐってもなされる。例えば性差やセクシュアリティは生得的・遺伝的なものか社会的・歴史的なものかでの議論である。物事には変化しがたい普遍的な本質があるとする本質主義が前者の立場をとり、普遍や本質などの認識は社会文化的に構築され可変的なものであるとする（社会）構築主義が後者の立場をとる（詳しくは児玉 2008:174 参照）。いずれか一方が優勢で他方が劣勢であるにしても、両者の相互作用によるのが実態であろう。重要なことは相互作用の中身である。

解釈の違いがみられるのは、人間固有の生得性や言語化される前の思考と関連する（1b,c）だけではない。言語化された後のことばと文化の関係（1a）、あるいはことばそのものや言説の秩序（1d,e）においてもみられる。このような違いの背後には言語観が大きな影響を与えている。例えばことばと論理を一体のものとするロゴス観と真実（真如）はことばの世界よりむしろことばを超えたところにあるとする言語観の間には言語の解釈に大きな隔たりがある（詳しくは児玉 2008:23 - 25 参照）。前者は古代ギリシャからキリスト教を通じてヨーロッパに伝わる言語観であり、後者は依言真如より離言真如がより深いものであるとみなす仏教に由来する日本の言語観である。

次例は少し長くなるが、ことばと文化の関係、およびことばのあいまいさについて日本人により主張されたものを紹介する。初めにことばと文化の関係を論じたものからみてみよう。

(3) a. 日本のものをほめる傾向がまた強く出てきた。日本人の国民性、日本の道徳、日本の衣食住…。私もいろいろの団体に招かれて日本語について話せといわれるが、…中には、のっけから、「日本語の美しさ」とか「美しい日本語」とか題をつけて、日本語をほめなければならぬように仕向けてくるものもある。…しかし、そういう日本語を愛するあまり欠点を見ないようにするのはいけなからう。むやみに自分のものをよいと思う傾向が強まった社会は危険をはらむ。

b. お手伝いさんが台所でコップを手からすべり落として、コップが割れてしまったとする。日本人はこのような時「私はコップを割りました」と言う。聞けばアメリカ人やヨーロッパ人は「コップ（グラス）が割れたよ」と言うそうだ。もし「私がコップを割りました」と言うならばそれは、グラスを壁に叩きつけたか、トンカチか何かで叩いた場合だそうだ。「私がコップを割りました」というような言い方をするのは、日本人には普通の言い方であるが、欧米人には思いもよらない言葉遣いかもしれない。…この簡潔な言い方の中に日本人の素晴らしい道義心が感じられるのではないか。誰が言い出したか、教えたか分からないが、日本人にそういった気持を根付かせてくれた先祖たちに謹んで頭を下げたい。

(3a) は日本語を日本文化と結びつけることを戒め、逆に (3b) は日本語のすばらしさを日本文化のすばらしさと結びつけている。一見、両者は別人の主張とみなされるが、実際は同一人物による。(3a) は金田一 (1976:47) であり、(3b) は金田一 (2000) である。24年後の金田一 (2000) は長年「日本語をほめなければいけないように仕向け」られたためか、責任感の強さを感じさせる日本語をつくってくれた先祖たちに感謝までしている。しかし (3b) には言語事実には大きなまちがいがみられる。コップに偶然手が触れてコップが割れたとき、日本語では「あっ、コップが割れた」というが、これに対応する英語は *Oh, I broke the glass.* である。「コップが割れた」の直訳といえる *The glass broke.* は話し手が関知しないところで割れたときに限られる。(3b) のような状況では日英語ともに「私がコップを割りました」(*I broke the glass.*) と報告する。(3b) の問題点は単に言語事実の誤認ではない。より大きい誤りは特定の表現を例に日本語を道義心などの日本文化と結合させて

いる点にある。

次例はことばのあいまいさの功罪を論じたものである。

(4) a. [日本の中空構造の短所として]最も近代的な組織の運営において、欧米諸国から見ればまったく不可解としか思えないような、統合性のない、誰が中心において責任を有しているのかが不明確な体制がとられている。…日本の近代的組織は、時に驚くべき無責任体制であることを示す事実は、枚挙に遑がないであろう。…中略…[日本の中空構造をなす]母性集団では、個人の責任は極めて曖昧であるが、連帯はどこまでひろがるか判断が難しいので、連帯責任は途方もなくひろがってゆくのである。

b. 現実というのは非常に多義的ではないか。非常に多義的ではあるがそれを一義的に把握した近代科学の世界観があまりにも強くなりすぎているのではないかと考える。…中略…ミッドウェイの海戦を分析すると確かに大将は判断を間違っている。しかし、これは近代科学的な方法で分析するから大将が間違っているのもっと日本的な考えによるとそのときのお月さんの出かたとか、波の揺れ方、それから星の輝きとか全部責任をもっているわけですから、大将だけを追及することは絶対に間違っているわけなんです。

(4a) によると、中心となる者が全体に対して統合する力も責任ももたない中空構造がいたるところに無責任体制をもたらし、いざ責任を問うときは連帯責任が途方もなく広がっていくとし、日本の中空構造が今は危機に立っていると警告している。逆に(4b)は事態を一義的に捉え、特定の人に責任を負わせるのは「まちがっている」という。(4a,b)は一見、別人の主張とみえるが、これも同一人物による。(4a)は河合(1999:62,67)であり、(4b)は河合(2003)である。(4a)と(4b)の乖離をどのように埋めるべきか判断に苦しむ。河合(2003)によると、近代科学の世界観は因果関係や責任を明確にし、一義的に把握しようとしているが、現実のもっと多義的である。依言真如より離言真如を訴える河合においては区別立てをしない「あいまいさ」への信仰は筋金入りである(詳しくは兎玉2008:23参照)。しかし問題は河合の主張そのものがあいまいであり、時には主張と異なる形で解釈される。河合(2003)の巻末で吉田敦彦は河合の「中空構造」を次のように解説している。

(5) このこと[日本の中空構造]は本書で言われている通りに、「日本における戦争責任の問題を極めて曖昧にしてしまった」要因にもなった。それで日本国民は、日中戦争から第二次世界大戦にかけてのあの暗黒の時代には、「個人としての導き手を欠いたままで、しかも一体となって」、責任が誰にあったのか曖昧な戦争をがむしゃらに戦い続けてしまうことにもなった。

確かに河合(1999)は「中空構造日本の危機」の項で日本に無責任体制が横行していることを論じている。(5)が示すように、日中戦争から第二次世界大戦にかけての暗黒の時代を招いたり、「日本における戦争責任の問題を極めて曖昧にしてしまった」とまでは述べていないが、河合(1999)は(5)のように解釈することができる。しかし(5)はあくまでも河合(1999)を読んだ吉田の感想や解釈である。その後書かれた河合(2003)の(4b)から判断すると、(5)は(4b)の「無責任体制」を過大に解釈していると吉田は理不尽な批判を受けるかもしれない。

(3a)と(3b)、(4a)と(4b)の間には矛盾ともいえる乖離がある。それぞれ別な人が主張する言説の一部であれば、素直に主張の違いとして受けとれる。ところが、同じ人物によるとすれば、事情はまったく違ってくる。今の私にとって最も気になることは、このように矛盾した言説がなぜまかり通るのかという点である。1つの原因はことばや言説そのものの特質として真逆の解釈を許すよ

うなあいまいさがあるのかもしれない。しかし同じ人が真逆の解釈を許すようなことを主張するのは主張者自身の責任によるところが大きい。金田一や河合の本音はそれぞれ (3b) や (4b) であるのかもしれない。もしそうであれば、(3a) や (4a) は自己欺瞞である。これもあいまいさを特徴とする日本の言説 (の秩序) のせいであるとみなした場合、日本の言説そのものを無意味なものとして否定することになる。例えば高僧が (4b) のように離言真如を説くことはありうる。神仏においては聞き手自身が精神世界の1つのあり方として受けとる心構えができていたためである。しかし俗人が現実世界について (4b) を主張する場合、それと対立する (4a) が容易に想定されるだけに、想定される主張への反証も挙げるべきである。同一人が (3a,b) (4a,b) のように対立する言説を弄することは許されない。事態や事物には白黒があいまいで不明確なこともある。その場合はいかにあいまいであるかを説明すれば済むことである。あいまいで矛盾した言説は存在の意味がない。言説は話し手の主張を明示してはじめて成立する。

### 3. 人間のなぞ

人間はことばを習得し世界と接触していくなかで、ある種の知識体系や理解力を身につけていく。Chomsky (1988a,b) は人間の知識について次の問題があるという。

#### (6) a. プラトンの問題

人間は限られた証拠 (経験) しかもたないのに、なぜこれほど多くのことを知りうるのか。

#### b. オーウエルの問題

人間は多くの証拠 (経験) をもちながらも、なぜこれほど少しのことしか知りえないのか。

#### c. デカルトの問題

人間は知識や能力をなぜ創造的に (外的刺激がなくても自由に) 使うことができるのか。

(6a) は人間が教えてもらわないことも身につけることができる不思議な力をもっていることを示している。これは人間の生得的能力に由来する。(6b) は (6a) の逆の問題である。人間は多くの経験をもちながら過去と同じ誤りを犯すことにもなる。(6a,b) は人間の能力には得意な領域と不得意な領域があることを示している。(6c) は人間が外的刺激がなくても場面に応じて創造的に新たな文を無限につくることができ、同じことが思考や行動においてもいえることを示している。例えば森の奥まで続く遊歩道を見て、自然と人間との共生とみる者もあれば、人間による自然の破壊とみる者もいる。またかつてナチスの被占領地域においてナチスに積極的・消極的に協力した者もあれば、抵抗した者もあった。動物や機械は外からの指令や仕掛けに同じ反応を示すが、人間は同じ状況に対して視点や動機の違いからしばしば異なる反応を示す。しかし人間が動物や機械とどれほど違うのかについては検討の余地がある。(1e) でみたように、話し手は生まれ育った社会や時代が歴史的につくりあげた「言説の秩序」に制御・支配されている。話し手は外的刺激によらず創造的な主張を自由に述べていると思っても、その主張は社会や時代の影響を強く受けているのかもしれない。もっとも、個人は既存の言説の秩序に従っているが、時にその秩序を変えることもできる。歴史は無数の個人が集まりつくりあげてきたものであるが、歴史の流れの中で個人の存在がどのような意味をもち、個人の力がどのように定立されるべきかは、これまた社会や時代によって異なる。

(6a) が人間に共通の思考や行動を生み、主に脳によって説明されるのに対して、(6b,c) は社会

での多様な要因が交錯するなかで集団や個人により異なる思考や行動を生み、主に心の働きと関連する。それだけに、(6)の問題は(1)でみたことばの特質とも密接に関連している。(6a)は主に(1b,c)と、(6b)は(1a,d,e)と、(6c)は(1a,b,c,e)と関連している。人間の知識体系・理解力・行動などでの(6a-c)のなぞに迫るには、心/脳や(1a-e)のことばの特質がそれぞれどこまでを固有の領域とし、どこからを互いに制御し合うのか、個別の分担領域と相互作用の領域を明らかにしていく必要がある。

ことばや人間のなぞはそれぞれ(1a-e)(6a-c)と多様な特質からなり、人間の活動全体の中で相互に関連している。それだけに言語や人間の分析法は排他的であってはならない。できるだけ多くの特質を扱えるよう包括的なものでなければならない。ここでは多様な特質が無原則に交錯しているわけでもない。言語や人間のふるまいは発達段階・活動領域・環境・歴史などによって異なり、分析法はその違いを説明しうるものでなければならない。

言語学はことばを分析することにより人間のなぞに迫ろうとするが、他の学問も同様である。哲学・文学・歴史・社会学・人類学・生物学・生命科学・脳科学なども、分析領域が異なり、各領域間に今なお大きなギャップがみられるが、究極的には人間のなぞに迫ろうとする点では変わらない。同じことは個人にもいえる。ダーウインの進化論、フロイトの無意識、マルコスの唯物史観、フーコーの言説の秩序などである。それぞれが生命体、心的過程、個人と社会とのつながりなど、異なる領域に属するが人間存在の全体像に向けて人間に共通する原理を探ろうとしている。言語学とフーコーの提案が部分的に重なるように、学問と個人の提案は対立するものではない。ともに人間のなぞを解く鍵を探ろうとしており、個人の提案を受け、学問も分析対象や分析方法を刷新させていく。

#### 4. 自然現象と人文社会現象

自然現象は規則的に起こり予測しやすいのに対して、人文社会現象は常に状況により事態が変化し予測しがたいとよくいわれる。例えば太陽のまわりを回る天体である9個の惑星(地球を含む)は太陽の引力を受けて極めて規則的な運行を続けている。地球は1日約24時間で1自転して朝晩を繰り返す、太陽のまわりを1年に1公転して四季を迎えている。地球の衛星である月は地球のまわりを約27日かけて1公転する間に満ち欠けの変化が起こるが、これは太陽に照らされる部分と影になる部分の違いによる。地球と月は万有引力で互いに引き合っている。引力はお互いの距離が近いほど強く働き、遠くなると弱くなり、潮の満ち干を起こす力となっている。一方、人文社会現象において歴史は繰り返すといわれるが、確かにこれまで世界的不況や戦争が歴史的に繰り返されてきた。しかしそれぞれの状況や原因が違っている。明確な因果関係が特定できないため、将来の事態を正確に予測することが困難である。人間は、一方では(6a)でみたように、自然的・生得的・遺伝的特性を有しているが、他方では(6b,c)でみたように、社会的・歴史的または利己的な要因で動き、動物や機械と違って同じ刺激に対して必ずしも同じ反応を示さない。後者の特質が人文社会現象をいっそう複雑にしている。

自然現象がすべて物理的・規則的な法則によって説明でき、予測できるわけではない。さまざまな要素が絡み合い、相互作用しながら、全体として見れば部分の動きの総和以上のふるまいを示す複雑な現象があり、複雑系と呼ばれる。例えば台風がいつどこに上陸し、高波が海辺のどこまで達

するか、地震がいつどこに起こり、建物などの被害はどうなるのか、木の葉がどこに舞い落ちるか、パチンコ玉がどの穴に入るか、蛾や蜂がいつどこで大量発生するかなど、物質世界だけでなく生命や社会には複雑系に属する現象が無数にある。30年ほど前までは210日の9月1日頃、台風が決まって日本を直撃していたが、今は環境の変化もあって台風がいつ襲ってくるかわからない。しかし天気予報は1・2年先はともかく、2・3日先の予報はかなり正確になっている。多様な要素を読み解くことで2・30年前の予報に比べ、はるかに精度を増している。これも複雑系を扱う科学の進歩による。

自然科学では自然現象を説明するため主として2つの方法がとられる。1つは自然現象の発生や自然界の物質の構成を仮説を用いて分析分解し、小さい単位の分子や原子あるいは遺伝子やゲノムにまで還元して説明しようとする方法で「(要素)還元論」と呼ばれる。あと1つは現象や物質の全体像を捉えるために分析対象の基本的な構成モデルを作成し、コンピュータ・シミュレーションにより修正を繰り返し、全体のふるまいを明らかにしようとする工学的な方法で「構成的手法」と呼ばれる。自然現象には要素が規則的に働き、全体が部分の総和に等しく、直線で図示できるような線形現象と、複雑系にみられるように部分を構成する要素が局所的に相互作用を起こしたり固有の特質を保持したりして全体として規則的に機能しない非線形現象がある。線形現象には主として前者の還元論が用いられ、非線形現象には後者の構成的手法が用いられる。複雑で不規則なふるまいをする非線形現象には大きく2つの状況が考えられる。1つは階層やグループを形成する部分の要素が特定の階層やグループではそれぞれ規則的にふるまっているが、異なる階層やグループを形成する場合は異なる形でふるまうことから全体が不規則にみえる場合である。あと1つは部分が特定の規則というより確率的なものに従う場合である。複雑系を扱う構成的手法は、通例、高速度のコンピュータを利用して全体を構成する要素のふるまいや、現象や物質の近似値を求めていく。

複雑系[非線形]現象に属することばと関連する翻訳機械を考えてみよう。今日、言語構造の原理が明らかでないからといって、翻訳機械がまったく作れないわけではない。語の意味は共起する他の語句、構文や文脈によって異なる。翻訳機械が扱う複数言語において語彙・構文・文脈などの分類については既存の文法を利用しながら、語義の違いがどのように現れるかを調べていく。1語が共起する他の語句だけをとりあげても、膨大な数にのぼる。コンピュータにより複数言語のコーパスを利用して語義・コロケーション・構文・文脈などを分類・対応させ、それぞれの使用頻度も解析して翻訳機械に入力していく。ここで忘れてならないのは、コーパス言語学が扱うコンピュータによる大規模な情報収集はすべて言語活動の結果である。その結果の中には新しい発見で生半可の言語分析よりはるかに貴重なものもある。しかし言語実態の結果だけに基づいて翻訳機械が作れるわけではない。言語分析にとって重要なことは、結果よりむしろなぜそのような結果になるのか、その原因を明らかにすることである。コーパス言語学における情報は言語分析の出発点であり、文法理論と協力して原因から結果に至る過程を明らかにする必要がある。この因果関係を明確にしてはじめて一般的に言語実態を説明でき、自然な言語を操る翻訳機械を完成することができる。

自然界の複雑系現象の分析ですでに多くの成果を出している自然科学に比べて、人間がかかわる人文社会科学ではあまり大きな変化がみられない。これは人文社会科学が対象とする人文社会現象には多様な要素が絡み、すべてが複雑系に属するためかもしれない。自然界にも複雑系現象が存在するにしても、その背景には規則的な線形現象が存在し、それが複雑系現象を解く鍵を提供しているのかもしれない。しかしより大きな原因は、自然現象と人文社会現象の間には諸現象を構成する



諸要素の中身が違うためと考えられる。

自然現象では H<sub>2</sub>O (水) が何であるかは、その物理的ミクロ構造である水素原子と酸素原子の結合によって余すところなく決定される。その意味で「原子論的」である。これに対して、例えば貨幣は単独では存在しえず、それが存在するためには社会の中で果す機能によって決定され、その前提としては通貨制度などのシステムが存在しなければならない点で「非原子論的」である (詳しくは柴田 1997:372 - 373 参照)。複雑系の自然現象を構成する諸要素が比較的固有の機能を保持するのに対し、人文社会現象の諸要素は変幻自在に他の要素と結合し、その機能には大きな柔軟性がある。その直接の原因は人文社会現象を生み出す主体である人間の思考そのものが複雑系を構成しているためであろう。現実の人間の思考には時に非合理的で予測不可能なこともある。

ことばは (1b,c) や (6a) の特質からわかるように、教えてもらわなくてもわかるものがあり、人文社会現象の中でも自然現象に近いものが多い。言語学が自然科学をモデルに分析法を模索しているのもそのためである。しかし自然現象と言語現象では複雑系にしても大きな違いがみられる。複雑系の自然現象において地震がいつどこで発生するかを予測することは確かに困難である。しかし地震は日本で発生しても南米で発生しても地域による違いはない。地震が発生するメカニズムは普遍的であり、地震に關与する諸要素の働きに違いはない。これに対して言語現象を構成する要素は、(1a,d,e) や (6b,c) の特質から示唆されるように、言語構造で果す機能が諸言語や文脈によって大きく異なり、他の要素との結合には気まぐれとも思われるほどの柔軟性がある。結果的には (2) の思考過程によって生まれた言語表現に大きな違いがみられる。この違いは言語表現全体からみると無秩序・無原則に映るが、個別の言語表現はそれぞれ諸言語の構造や文脈に応じた規則に従っている。

次例の日英語を比較してみよう。

(7) a. John's [\*table's] leg vs ジョン [テーブル] の脚

b. John sent Mary [\*London] a parcel. vs ジョンがメアリー [ロンドン] に小包を送った。

c. There's a man [desk] in the room. vs 部屋に男の人 [\*机] がいる。

d. John [100 dollars] can buy the car. vs ジョン [\*100ドル] はその車を買える。

e. The summer saw [\*looked at] the climax of inflation. vs \*その夏がインフレの山場を見た。

f. This car sells [\*buys] easily. vs この車は安く売れる [買える] 。

g. John took Mary [the letter] to the office. vs ジョンがメアリー [\*手紙] を事務所へ連れて行った。

自然界で生物か無生物かはだれの認識においても共通しており、非言語的な判断に違いはない。しかしことばに現れる意味素性の<±生物>の扱いは構文や諸言語により多様に分かれる。(7) の日本語は英語を直訳したものである。(7a) のアポストロフィ構文や (7b) の二重目的語構文での間接目的語は英語では<±生物>に応じて適格性が異なるが、それに対応する日本語では違いがない。英語ではアポストロフィ s のついた名詞や間接目的語が後続の名詞を<+所有>することが含意されており、無生物は<所有>することができないため不適格となる。(7c) の there 構文では動詞に<+存在>が含意されている。(7a,b) と違って<±生物>の名詞が等しく用いられるが、日本語では動詞の<+存在>につく名詞は<±生物>で区別され、無生物の<存在>は「いる」ではなく「ある」で示される。英語は (7d) からうかがえるように広く無生物主語が用いられるが、日本語の主語は通例<+意図>をもつ<+生物>に限られる。しかし英語は常に<±意図>に鈍感で自由に無

生物主語が用いられるわけではない。(7e) の *looked at* は <+意図> の含意が強いため無生物主語と折り合いが悪く排除される。中間構文である (7f) の *sell* と *buy* は一見対等にみえるが、<+生物> の人を主語にした場合、「売り手」と「買い手」で意図性に強弱があり、*buy* は強い<+意図> を含意するため (7e) の無生物主語と同じく排除される。(7e,f) において英語が意図性の強弱に敏感であるのに対して、日本語ではその区別がみられない。同一言語においても同じ意味素性が構文によって異なるふるまいをする。そのことは (7g) の <±生物> にもうかがえる。(7g) の単一目的語構文では (7b) の二重目的語構文と逆になる。つまり (7b) で <±生物> に敏感な英語が (7g) では <±生物> のいずれをも目的語にとり、(7b) で <±生物> に鈍感な日本語が (7g) では <±生物> を区別し、目的語が <-生物、-意図> の場合、「連れて」ではなく「持って」で示される。(7a-g) には <±生物、±所有、±存在、±意図> の意味素性が関与しているが、意味素性の付与には必ずしも一貫した原理が今日まだ見出されていない。

言語現象を構成する諸要素の結合の仕方が複雑で不安定なため、複雑系の言語現象を構成する要素自体を組み替えたり、新しい要素を追加することにより、言語構造を見直すことがしばしば求められる。こうした状況は言語学に限らず、人文社会科学に共通している。

## 5. 言語学の現状

20世紀に自然科学のめざましい発展をみながら、言語学も Saussure (1916) 以後言語のしくみを明らかにする分析法を探ってきた。前節でみたように、言語学は自然科学をモデルにしてだれが分析しても同じ結果が出るような明示的な分析法を求めてきた。そこでは分析対象として一組の主部・述部からなる文を最大の単位とした。確かに言語活動は文を積み重ねたものからなり、文は言語活動の基礎といえる。しかし分析の明示性を求めるあまり文内の構造分析にとどまるならば、文と文のつながりや言説全体の意図や主張など、文を超える言語表現は分析対象から除外され、言語活動で伝えられるはずの「意味」が十全に考察されないことになる。その点、今日の言語学は分析対象の狭さや文内の構造中心主義の閉塞状況に陥っている。

現在の言語学は主に文内の言語構造を分析対象にしているが、その構造が十分明らかになっているわけではない。(7) でみたように、多様な意味素性の結合を支配する原理が今日まだ見出されていない。理論上一貫した原理をコンピュータに入力して誤りのない完全な翻訳機械を作ることができる段階ではない。多くの未解決の課題が残されている。本節では現在展開されている言語分析の一端を紹介する。

本論のタイトルである「ことばの不思議」の下線部に不自然ですわりの悪さを感じる人があるかもしれない。辞書では通例「不思議」に名詞と形容動詞の2つの品詞が付与されている。「不思議」は「世界の七不思議」やL. キャロルの『不思議の国のアリス』(Alice's Adventures in Wonderland) などの特定のコロケーションでは名詞の機能を果しているが、多くは形容動詞として用いられる。これもことばが本来もつ (1d) の記号のあいまいさに由来するのかもしれない。こうした品詞のあいまいさはどの言語にもみられる。Ross (1973) は英語を対象に 'Nouniness' (名詞性) と題して同じ名詞にも「名詞らしさ」に違いがあり、名詞・形容詞・動詞の品詞が連続体をなしていることを示している。「不思議」と類似の意味をもつ他の語についてその活用やコロケーションを比較してみよ

う。

- (8) 不思議、不可解、奇怪、なぞ
- a. ~な事件
  - a'. 非常に~な事件
  - b. ~の事件
  - b'. 非常に~の事件
  - c. 7つの~
  - d. 何の~もない事件
  - e. その事件は~至極である。
  - f. その事件は~によく話題になる。
  - g. その事件は~に含まれている。

(8) の 4 語のうち「なぞ」は名詞であり、他の 3 語は名詞と形容動詞に分類される。(8a-g) の~部分に挿入した場合、4 語が同じふるまいをする項は (8b') のほかに 1 つもない。(8a) (8a') では形容動詞の 3 語がいずれも適格であり、(8b) は名詞のみが適格であり、(8b') は 4 語とも不適格である。形容動詞の 3 語は (8c,g) でも不適格であるが、(8d) では「不思議」のみが「なぞ」とともに適格であり、(8e) では「奇怪」のみ、(8f) では「不思議」のみが適格である。

次に動詞とそれと共に起する名詞との関係を見てみよう。

- (9) a. 花子が 太郎を 押した。(push)  
 b. 花子が 太郎に 近づいた。(approach)  
 c. 花子が 太郎と 結婚した。(marry)

ヤコブセン (1989) によると、(9a) の「NP が NP を」という格配列の文では「が」格の名詞句が「を」格の名詞句の上位に立ち、それを全面的に支配するという意味で<支配的>であり、(9c) の「NP が NP と」では名詞句が互いに入れ替え可能であるという意味で<対称的>である。(9b) の「NP が NP に」は両者の中間的な性質をもつことになる。多くの意味素性は動詞とその項である名詞との関係で付与されるが、<支配的><対称的>の意味素性は (7a,b) の<±所有>と同じく名詞と名詞との関係に対して付与される。日本語では名詞に「を・に・と」の異なる助詞を伴う動詞が、英語では (9) 末尾の ( ) 内に示したように、すべて他動詞で示される。

日本語で (9a) の「押す」は常に「何を押す」のかが問われ、意味・統語上目的語を必要とするが、(9c) の「結婚する」は意味・統語上それだけで独立しうるため自動詞とみなされる。(9b) の「近づく」はその中間で意味・統語上「何に近づく」かが問われるが、(9b) の「結婚する」と同じく「花子と太郎が近づいた」のように意味・統語上自動詞にも用いられる。日本語では動詞の意味の違いが形式上助詞の「を・に・と」に反映している。また日本語では主語・目的語などの概念は明確に存在するが、既知情報であればいずれも省略することができ、さらに受身化は自動詞も可能であり、自動詞・他動詞の形式上の区別立てはあまり意味がない。これに対して英語の自動詞・他動詞の区別は、意味の反映というより、形式上動詞と名詞の間に前置詞を介在させるか否かによって決定され、文法上重要な概念である。例えば (9c) の「結婚する」の英語の marry が他動詞であるのに、意味上同じ相互動詞の「けんかする」に対応する英語の quarrel は自動詞である。要するに、英語の自動詞・他動詞が意味よりむしろ統語上目的語を必要とするか否かにより決定される範疇であるのに対して、日本語の「を」格は統語上の目的語標識というよりむしろ意味を合図するも

のである。

格形態ともいえる助詞が意味に深くかかわるとすれば、(9) の<支配的><対称的>により「を・に・と」のすべての用法が説明できるわけではない。本節の残りの部分では日本語の「を」格の意味や目的語に関連するものに絞って考察する。

- (10) a. 花子が コップを 割った。  
 b. 花子が ボールを けた。  
 c. 花子が 公園で 太郎を 見た。  
 d. Aが Bを 含む。
- (11) a. 花子に 3人の 子どもが いる。  
 b. 花子に 英語が わかる。  
 c. 花子に 音楽が 聞こえた。  
 d. 花子に 今 お金が 必要だ。
- (12) a. <経路> 国道を 行く (~を通って)  
 b. <起点> 電車を 降りる (~から)  
 c. <移動場所> グランドを 走る (~で)  
 d. <状況> 雨の中を 戦う (~で)  
 e. <「何を」とがめだて文> 何を ぼんやりしているんだ。(φ)

(10) (11) の「を」格名詞と「が」格名詞には<対象>の意味役割が与えられる。<対象>とはすべての文に最低1つ存在する意味役割で述語が表す状況(行為・包含・状態など)が直接目当てとする対象をさし、通例、他動詞では目的語、自動詞では主語に付与される。この規定は Anderson (1977,1986) の abs (絶対格) に相当する(詳しくは兎玉 1991:29,41 参照)。<対象>の「を」格には動詞が表す状況から直接の影響を受け(10a)のように変化するものや、(10b-d)のように変化しないものがある。動詞自体は(10a,b)のように<+意図>をもつ場合も、(10c,d)のように<+意図>をもたない場合もある。(10)の「を」格目的語と(11)の「が」格目的語の違いは動詞の意味役割がアスペクト上<±状態>のいずれかによって決定される。

(11)のように動詞が<+状態>を表わす場合、目的語は「を」格に代わって「が」格をとり、主語は文頭の「に」格に付与される。「に」格が主語であることは尊敬語化が「に」格によって誘発されることから証明される。例えば(11a)で「花子に」を「先生に」に代えると「先生に3人の子どもがおありになる」となる。日本語は、本来、対格言語であるが、(11a-d)のような「に」格主語(与格主語)は能格言語の能格に対応する。能格言語では他動詞文の目的語と自動詞文の主語が無標の格形態(絶対格)をもち、他動詞文の主語が特別の格形態(能格)をもつ。(11)では他動詞文の目的語が自動詞文の主語と同じ「が」格をとっており、日本語にも能格言語の特質が部分的に組み込まれている。能格言語での無標の絶対格、あるいは日本語の(11)の目的語や自動詞文の主語に付与される「が」格がなぜ存在するかの疑問があるかもしれないが、これは意味の反映である。能格言語の絶対格や日本語で能格言語的性格をもつ「が」格が生まれたのは、ともに意味役割の<+対象>が付与されるためである。

(12)の自動詞文の「を」格と(10)の他動詞分の「を」格の違いは何であろうか。いずれも<接点>を表しているが、問題はその中身である。動詞自体は(10)が<±意図>を付与されるのに対して(12)は<+意図>に限られる。「紙ふぶきが宙を飛ぶ[舞う]」のように無生物が比喩的に意

図をもつ生物のようにふるまう場合にも用いられる。(7)におけると同じように、日本語でも<±意図>に敏感である。また「を」格の名詞は(10)では<対象>が付与されるが、(12)は意図的行為が目当てとする<対象>ではなく、意図的行為が目当てとして向かう場面であり、具体的には(12a-e)の初めに示した意味役割が付与される(用例(12d,e)は天野2009による)。この意味役割は(10)で「を」を伴う目的語の<対象>と似ているが、動詞が表す行為・状態が直接目当てとする「モノ」ではない点で異なる。(12)の自動詞文では主語が省略されているが、<対象>はその主語に付与される。(12)の用例末尾の( )内は(12a)のように「を」の意味を表わしたり(12b-d)のように「を」格に代わって用いられる格助詞であり、動詞が表す意図的行為の目当てとして向かう場面ではなく、出来事がたまたま生じる場面や状況を示している。例えば(12b,c)では<-意図>の動詞を用いて「電車から落ちる」や「グランドで寝る」といえるが、「\* 電車を落ちる」や「\* グランドを寝る」とはいえない。「を」を伴う(12)の動詞はあくまでも意図的行為である。(12e)でも「?何を老いぼれてるの」とか「\* 何をおぼれているの」とはいわない。「老いぼれる」や「おぼれる」は<-意図>のためである。(12)の動詞は目的意識が強く、それに伴う名詞は意図的行為を遂行するために選ばれた場面を表し、どんな場面が選ばれたにしても行為を遂行する強い意図が含意されている。しかし意図性には微妙な問題もある。例えば「遊ぶ」や「ぶらつく」は本来目的意識の欠けた行為であるが、(12c)では「グランド\*を/で遊ぶ」や「街中を/でぶらつく」となり、両者のふるまいが異なる。(12c)の「を」は単なる<場所>ではなく動詞が<移動>を含意するためである。つまり「を」格は<対象>そのものではなく、<対象>が<移動する場所>である。先日あるデパートで「百貨店を遊ぼう」の店内宣伝ポスターを見た。日常表現の「百貨店で遊ぼう」としないこの破格文からは「百貨店内をあちこち回って(ウインドー)ショッピングを楽しみましょう」という意図が読みとれる。

次に動詞と<+状態>を表わす「～たい」の結合した例をみてみよう。

- (13) a. 水 を/が 飲みたい。  
 b. ハエ を/\*が 殺したい。  
 c. グランド を/で/\*が 走りたい。  
 d. コップ \*を/に/\*が 触りたい。

(13a)では「を」格と「が」格が容認されるが、「を」格は「飲み」(<飲む>に依存し、「が」格は「～たい」に依存すると考えられる。(13b)の目的語の「ハエ」は(13a)の「水」と同じく<対象>を付与されるが、適格性が異なる。これは(13b)の「ハエ」の意味役割が<対象>の下位類として動詞の影響を直接受けて変化する<被動者>(patient)のためである。<被動者>は目的語のプロトタイプであり、その動詞は他動詞性が最も強い。この種の動詞は(11)のように<-意図、+状態>を表す動詞の対極にあり、「～たい」の存在を無視し、目的語に<被動者>の「を」格のみを認める。(13c)は(12c)の自動詞と{～たい}が結合したものであるが、「が」格のみが容認されない。(13c)に示していないが、その主語は(11a-d)の主語と違って「が」格のみが許される。ここには二重「が」格を避けようとする力が働いている。(13d)は「を」格をとらない名詞は「が」格もとらないことを示している。

(8) - (13) からうかがえるように、格形態・文法関係・意味役割の三者が同一言語においてさへ多様に交錯している。異言語間では結合の複雑さがさらに増している。子どもは母語を習得する際、こうした複雑系現象を大人から教えてもらわなくても、また自分で説明できなくても、直感的に把

握している。その際、複雑系を形成しているしくみの記憶違いや誤解から、ときに言語表現の意味や用法をまちがえることがある。しかしそのまちがいは広範な言語活動全体からみると、取るに足りないごく一部である。言語活動全体は人間の不思議な記憶力によっても支えられている。生得的な言語能力を含む(1a-e)の5つのなぞと記憶力の間にも大きななぞがひそんでいる。

本節は言語学の現状の一端を示したものにすぎない。言語現象は極めて複雑で多くの未解決の問題をかかえており、今後の新しい発見が期待される。だからといって、文内の言語構造にとどまってよいものではない。ことばのなぞは文内だけにあるわけではない。文を超えたところにそれ以上のなぞや問題がひそんでいる。特に(3)(4)でみたような矛盾やまやかしがまかり通ることにもなる。

## 6. 言語学の課題

言語は形式(または音声)と意味が結合したものであり、言語学は両者の関係を明らかにしようとしている。そこでは表面に現れた形式と背後に埋め込まれている意味、および両者を結びつける言語のしくみが議論される。形式は表面に現れ客観的にそれとわかるとはいえ、意味と無関係に存在するわけではない。意味と結合してはじめて存在することができる。ところが意味は基本的に抽象化された形でしか示されない。これは単語の意味に限らない。言語分析で用いられるすべての範疇や用法に抽象的な意味が関与している。前節でみたように、例えば形式の問題と考えられる品詞にも名詞性に段階があり、助詞の「を」にも多様な意味が埋め込まれ、何を主語・目的語と呼ぶかも意味を無視して決定することができない。言語現象にはすべて意味が関与している。

言語学の課題は、前節でみたように、文内の言語構造に多くの未解決の問題が残っている。その問題もすべて意味に関与しているとすれば、文内にとどまっていたら解決できない。意味の世界は文を超えたところでさらに大きく広がっている。そこでは文と文のつながり、言説全体での意図や主張、人は何を語り何を語ろうとしないのかなど、言語活動の実態とともに人間の姿が現れている。今日の言語学が分析対象の狭さや言語構造中心主義の閉塞状況から脱け出すためには、どこに出口を求めたらよいのであろうか。言語学は意味を軸に文を超える言説にまで分析対象を拡大し、それを文内の言語構造と相互に照射することによりはじめて言語のしくみや言語活動の全体像に近づくことができよう。

具体的な課題は(1a-e)で示したことばのなぞを解明することである。ここには言語化される前の概念化から言語化された語・文・言説に至るまでの意味が含まれている。つまり、言語と思考・社会・文化の関係にみられる心的過程である。言語表現には言語記号固有の特質としての予測可能な進展と気まぐれとも思える展開があり、話し手や社会の意図や価値観・信念体系などが埋め込まれている。人間の生得的能力・文脈(社会・時代・場面など)の影響・記憶力などがどのように文内の言語構造や言説を形成しているかを明らかにするためには、言語活動を支えている諸要素について部分と全体の関係を精査する必要がある。ここでは分析対象の拡大と分析方法の見直しが求められる。

例えば話し手の主体性について考えてみよう。言語学で比較的の主体性を検討している認知言語学でさえ、文内または隣接する2・3の文を対象に話し手の事態把握のあり様を分析するだけであり、極めて限定された主体性にとどまる。もし言説全体を分析対象にした場合、社会の制約を受けなが

らも社会的役割を担う者としての言語主体者を考察することになり、主体は文内などの主体よりはるかに広いひろがりをもつ。前者が認知的主体であるのに対して、後者は社会的主体といえる。さらに両者にまたがる第3の主体として人は語りたいことだけを語り語りたくないことに口をつむぎ、見たいものだけを見て見たくないものに目を閉ざし、作為的行為とともに意識的に何も語らず何も見ないことにする「不作為の作為」をなす意図的主体が考えられる。意図的主体は感覚やイデオロギーの好悪とも結びつき、第1・第2の主体と交錯している。第2・第3の主体は文内や隣接する2・3の文だけで捉えることはできない。その把握は分析対象を拡大してはじめて可能であり、当然の帰結として分析方法も主体内容の再検討を迫られるであろう。

だれもがことばを駆使しており、言語表現の文字通りの意味はだれにも理解できる。直感的に理解できることをことばで説明することは、人間のなぞの一部を解くことになる。しかしそれはある意味で後追いの分析ともいえる。問題は「理解」の内容である。発話は現実を忠実に映しているのか、発話の真の意図は何か、なぜそのような発話をするのかなどの疑問にも答えてはじめて「理解」は十分なものとなる。言語学が言語のしくみや言語活動の全体像に迫るものであるとすれば、個人の具体的な発話の正確な理解だけでなく、社会の多様な言語問題の分析にも耐えうるものでなければならぬ。例えば社会における言語活動の実態、言語観のあり方、言語政策などの分析である。

テレビの出現後、視聴覚優位の状況はますます強まっている。この傾向は世界的な現象であるが、依言真如より離言真如の伝統をもつ日本では特に顕著である。それは日本から世界へ発信しているマンガ・アニメに限らない。CGによる virtual (現実そっくり) の映像が real (現実) のものとして感動を与え、虚実や真偽そのものを不問にしている。ことばの世界でも日本では饒舌より寡黙が好感をもたれ、「話してわかり合う」より「察し合って心を通わせる」ほうが高尚とみなされる風潮は少しも変らない。確かに黙っていても互いに意図を伝え合うことがあるかもしれない。しかしこれは仲間内のみ通用し、ソトの世界には通用しない。何事にも説明が求められる時代の要請にも逆行している。視聴覚優位の勢いが増すにつれて、相対的にことばの力が低下している。政治の世界では主張や責任をあいまいにしたことば遊びともいえるような言説が横行し、マス・メディアではテレビなどでの露出による人気や権威と錯覚され、問題の周辺のみが話題にされ問題の核心が議論され報道されることは少ない。言語力の弱体化と併行して抽象化や想像力を必要とする思索を敬遠し、表層的・即物的・感覚的な情報や流行価値への信仰が強まっている。

2009年5月より法律家でない市民参加の裁判員制度が始まり、これまでにない市民感覚が反映されておおむね好評である。市民にもわかる話しことばが法廷に復権し、裁判制度に新風を吹き込んだ点は好ましい。しかし気がかりな点が1つある。最終的な判決が検察側の求刑をそのまま受け入れたり半減したりと地域や事件内容による差が大きい。ここには裁判官・裁判員と検察側の間に大きなズレがある。そのズレがたまたま裁判員に選ばれた市民の感覚の違いに起因するとしたら、被告にとっては不公平な裁きとなる。

言語政策として2000年3月に小渕首相の下で提案された英語第二公用語化案は、国際化に対応するための気まぐれな思いつきで、2・3ヶ月後には話題にもならなかった。問題はお粗末な提案というだけではない。不思議なことに、この大規模な提案の作成過程には言語学者が一人も参加していなかった。事のよしあしはともかく、戦前の大東亜共栄圏での日本語教育の普及に多くの言語学者が動員されたのと対照的である。最近、水村(2008)の『日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』が出版され、刺激的な本書に対して多くの人が賛否両論を戦わしているが、寡聞にして言語学

者からの意見は何も知らない。こうした状況は言語学が閉塞状況に陥り、社会へ何の発信もせず、社会からの期待もなくなった結果なのであろうか。

今日、言語学は閉塞状況から脱出し、抽象的な言語構造だけでなく現実の発話や言説をも分析しようとする視点をもつことが何よりも求められる。その要請に応えるためには、言語理論として分析対象の拡大と分析方法の見直しが必要である。その作業過程では、言語化される前の概念化から言語化された語句・文・言説に至るまでの意味を中心に扱うことになろう。その意味には生得的能力、生後の経験、言語と社会・文化の相互作用を通しての人間の姿が反映されている。このような意味を明らかにしてはじめてことばのなぞに接近することができよう。

### 引用文献

- 天野みどり. 2009. 「他動構文の意味——拡張した「一ガーヲ構文」の意味解釈をめぐって——」(関西言語学会第34回大会での口頭発表資料)
- Anderson, J.M. 1977. *On Case Grammar: Prolegomena to a Theory of Grammatical Relations*. London: Croom Helm.
- Anderson, J.M. 1986. 'Structural Analogy and Case Grammar.' *Lingua* 70:79-126.
- Chafe, W. 2005. 'The Relation of Grammar to Thought.' In C.S. Butler, M.de los Á. Gomez-González, and S.M. Doval-Suárez (eds.) *The Dynamics of Language Use: Functional and Cognitive Perspectives*, 57-78. Amsterdam: John Benjamins.
- Chomsky, N. 1988a. *Language and Problems of Knowledge*. Cambridge (MA): MIT Press.
- Chomsky, N. 1988b. *Generative Grammar: Its Basis, Development and Prospects*. Kyoto: Kyoto University of Foreign Affairs.
- Foucault, M. 1971. *L'ordre du discours*. Paris: Gallimard. [中村雄二郎(訳) 1972『言語表現の秩序』東京: 河出書房]
- ヤコブセン, W.A. 1989. 「他動性とプロトタイプ論」久野暉・柴谷方良(編)『日本語学の新展開』213-217, 東京: くろしお出版.
- 河合隼雄. 1999. 『中空構造日本の深層』東京: 中央公論社(中公文庫).
- 河合隼雄. 2003. 「曖昧さと『私』」河合隼雄・中沢新一(編)『「あいまい」の知』1-15. 東京: 岩波書店.
- 金田一春彦. 1976. 『日本語の希望』東京: 大修館書店.
- 金田一春彦. 2000. 「日本語のころ」日本エッセイスト・クラブ(編)『日本語のころ』170-175.
- 児玉徳美. 1991. 『言語のしくみ——意味と形の統合』東京: 大修館書店.
- 児玉徳美. 2004. 『言語分析の新展開——ことばの広がりに応える——』東京: 開拓社.
- 児玉徳美. 2006. 『ヒト・ことば・社会』東京: 開拓社.
- 児玉徳美. 2008. 『ことばと論理——このままでいいのか言語分析——』東京: 開拓社.
- 水村美苗. 2008. 『日本語が亡びるとき——英語の世紀の中で』東京: 筑摩書房.
- Ross, J.R. 1973. 'Nouniness.' Fujimura, O. (ed.) *Three Dimensions of Linguistic Research*, Tokyo: TEC, 137-257. Also reprinted in B.Aarts et al (eds.) *Fuzzy Grammar: A Reader* 351-422, Oxford: Oxford University Press.
- Saussure, F. de. 1916. *Cours de linguistique générale*. Paris: Payot.
- 柴田正良(訳・解説). 1997. 『意味の全体論——ホーリズム、その買い物ガイド』(原著: J.Fodor and E.Lepore, 1992, *Holism: A Shopper's Guide*, Oxford: Basil Blackwell) 東京: 産業図書.

(本学名誉教授)